ずいそう

西の美術館，東の博物館

古　川　広　子

趣味には登山やマラソンのように「やる」と決めて始めるものと，「気がついたらいつの間に」のパターンがある。私の趣味は後者の「ラジエーター暖房の探訪」である。文字通り探して訪れ，その暖かさを楽しむのであるが，気がつけば本棚には暖房の本や外国のカタログが並び，あれほど嫌いだった寒い冬を毎年心待ちにしていた。以前は学校や病院，公共施設などに設置されたラジエーターは，暖房技術の発達により今では見ることが少なくなった。そんなラジエーターを独り占めできるのが，クラシックホテルへの投宿である。ラジエーターは空洞の管に温水あるいは蒸気を通し放熱させて部屋を暖めるが，この管に装飾したものがオーナメンタルタイプ。いろいろなオーナメンタルが楽しめるのは古都，奈良にある奈良ホテル。明治42年に竣工した本館には形や模様の違うものが並び，それはまるで「ラジエーターの美術館」である。古来より名湯として知られた箱根に建つのは，明治11年に創業した富士屋ホテル。こちらはオーナメンタルが見当たらないので華やかではないが，人知れず凄いものを内包している。これをチェックインしてからチェックアウトするまで眺めるのだが，館内には「様子の變な人を発見した時は感ずかれぬやうに其の様子と場所を帳場へ連絡すること」という昔の注意書きが各所に掲げてあるので，フロントに「館内をぶらぶらします」と申告するのは必須である。ホテルには本館（明治24年）西洋館（明治39年）花御殿（昭和11年）と宿泊できる近代建築があり，建物どうしは連絡しているので宿泊客は自由に行き来できる。ラジエーターはその材質から鋳鉄製，スチール製，鉄管と分かれるが，ここにはそれがすべてあり，しかも現役で稼働している。中でも薄いペラペラ状のスチール製は規格がないほどマイナーな製品で，採用例も少ない。ここには「PILOT」マークの「合資会社ヤンソン製作所」製と東京の築地にあった「丸ノ内工業株式会社」製があり，ヤンソン製は静岡市のマッケンジー住宅でも見ることができる。ヤンソンは衛生工事のパイオニア，

奈良ホテルの１柱タイプ

奈良ホテルの２柱タイプ

スチールラジエーター

さりげない鉄管ラジエーター

西原衛生工業所を創業した西原脩三が率いた今は無きメーカーである。鉄管はあまりの武骨さから工場などで採用されるようで，知ってはいたが実物を見たことがなかった。その鉄管が４本，長い廊下を屈曲する姿は夢のようである。ラジエーターで最もポピュラーなのが鋳鉄製。鋳鉄製は昭和３年に日本標準規格（JES）として規格が決められ，戦後は日本工業規格（JIS）となり，今は廃止された。鋳鉄製には床に置くタイプと壁に掛けるタイプがあり，壁掛用では背の低い物を天井に近い欄間部（確かに壁であるが）に設置するといった面白いことをしている。床置用は２柱・３柱・５柱とバリエーションがあり，規格外品やJIS品もある。メーカーは舶来のアメリカン・ラジエーター社，国産では昭和鉄工，高砂鉄工，前田鉄工所など多岐にわたる。この多彩さを言うならば，富士屋ホテルは「ラジエーターの博物館」である。明治26年に竣工した日光のクラシックホテル，金谷ホテルでは「NIAGARA」と書かれたラジエーターを見たが，富士屋ホテルにも同じマークのラジエーターがある。一般客も見学できるホテルの史料展示室をのぞくと「金谷ホテルの創業者金谷善一郎の次男正造と富士屋ホテルの創業者山口仙之助の長女孝子と結婚，山口家に入婿」とあり，この２館でしか見たことがないラジエーターを通して，日本のホテル史に視野が広がるのである。富士屋ホテルは客室にも温泉を引いており，散策後湯船につかりながらあれやこれやを考えるのも楽しい。もっと手足を伸ばしたいなら，部屋を出て浴場を利用することもできる。設備はその宿命で，設置した時から老朽化が始まる。奈良ホテルはこの春より始まる耐震補強工事を機会に，ラジエーター暖房を廃止するという。現在各地で供用しているラジエーターも，いずれは廃止の時を迎えるだろう。それまでにより多くのラジエーターと出会えたら，と今年も寒い冬を待つのである。

規格にない４柱

高いところに設置した壁掛けタイプ

いまだに謎のNIAGARA

いつかはこんな日が来る

――ふるかわ　ひろこ――